

アナキズムについてのノート

ノーム・チョムスキー
江川 允 通訳

アナキズムに共鳴したフランスのある著述家が、一八九〇年代に「アナキズムの背後は広い、」それはどんなことにも——「アナキズムにとっての不倶戴天の敵だってそれよりひどいことはできないような」ことをする（一部のアナキスト）の行為を含めて、とつけ加え——紙のように耐える、と書いている。「アナキズム的」と呼ばれてきたような様式の思想や行動はたくさんあった。それらのなかには、相反する傾向をもつものもあるが、そうしたものも全部ひっくるめて一つの総括的な理論やイデオロギーにする……こういったことをしようとしても、うまくいく望みは薄いだらう。フランスの著述家、ダニエル・ゲランは、その著書『アナキズム』⁽²⁾のなかで、リバータリアン思想の歴史から、現在も活動しており、なお発展している一つの伝統を抜き出そうとしたが、もしわれわれが同じことにとりかかろうとしてみたとしても、この主義に社会と社会変動についての特定の、かつ明確な理論として系統立った表現を与えるのは、やはりむずかしいであらう。

ドイツのアナキズム史の研究者、ルドルフ・ロッカーは、彼の

『アナルコサンジカリズム』⁽³⁾という著作のなかで、アナルコサンジカリズムへ向かってのアナキズム思想の発展について、ゲランの著作にもたとえられる線に沿って、体系的な構想を立てている。アナキズムは「固定した、自己閉鎖的な体系というよりも、人類の歴史的発展のなかではつきりと見分けられる一つの傾向である」と彼は書いている。

「そのような傾向とは、教会や政府の全制度による知的後見と対照をなして、生における個人的な、また社会的な諸力のいっさいが、自由に妨げられることなく解放たれるようにしようとするものである。ここでのいう自由でさえ絶対的な概念ではなくて、相対的な概念に過ぎない。なぜなら、自由とは、より広くなり、より多様な仕方により広い範囲に影響を及ぼそうと、不断に、しているものだからである。アナキストにとって、自由とは、抽象的な哲学的概念ではない。各人が自然から授かった力、能力、才能のすべてを十分に発展させ、社会のために利用する重要な具体的可能性……それが自由なのである。このような人類の自然な発展

が、教会や政府からの後見によって影響されることが少なれば少ないほど、それと反比例して、人間の人格はますます有能で調和のとれたものとなり、また人格はそれがそのなかで成長する社会の知的な文化の高さを示す度合いとなっていくであろう。」

特定の、そして委曲を尽した社会理論を形成しないような「人類の歴史的發展のなかではつきり見分けられる傾向」といったものを研究したところで、そんなことにどれだけ価値があるのだ、という疑問が起きてきてもよい。事実、アナキズムをユートピア的な、不定形な、原始的なもの、さもなくば複雑な社会の現実と相容れないものだと片づけている評解者もたくさんいるのである。けれども、ほかの論じ方もあるだろう。つまり、ある時代には社会の安全や生存や経済的發展に対する要求によって正当化されたため発生し、それ以来存続してきたのだけれども、今となっては物質文明上の、また文化の、欠陥を軽減するどころか、かえってそれらのものとなつていくような権威や圧制があるが、こうした権威と圧制のおおいはきとることこそ、歴史のどの段階においても、われわれが関心をもっていることなのだ、ともいえるのである。

もしそうなら、現在と未来のために決定された社会変化についての教義といったものは、存在しないであろう。また、社会変化の目標についての特定の、かつ不変の概念といったものさえ存在しない、ということに必然的になるであろう。確かに、人間性についての、また社会の形式が数あるなかでもうまくいくようなものの範囲についてのわれわれの理解は、たいそう初歩的なものでしかない。そのため、たとえどんなに影響するところが広範な教義があつても、大きな疑惑をもつて扱わなければならない。それはちょうどわ

れわれが、「人間性」とか、「能率の要求」とか、「現代生活の複雑さ」とかは、このような、またはあのような形の圧制や専制的支配を必要とする、といったことを聞くときに、懐疑的であるのが適切であるようなものである。

しかしながらある特定の時期には、その時機の課題に適切な、この「人類の歴史的發展のなかではつきりと見分けられる傾向」についての特定の認識を、われわれの理解が許す限り啓発するのは、全く当をえたことである。ロッカーにとつての「現代に対して提起された問題は、人類を経済的搾取と、政治的社会的奴隷化という災禍から解放するという問題」である。そしてそのための方法とは、国家権力の奪取と行使でもなければ、議会政治を無効にすることでもない。それは「人々の経済生活を根底から建て直し、それを社会主義の精神でうち建てること」である。

「けれども、この課題に適任なのは、生産者だけである。なぜなら生産者こそは、そこから新しい未来が起ころう、社会における唯一の価値創造的要素だからである。彼らの課題は、経済的搾取が労働者階級に負わせたあらゆる桎梏から労働者階級を解放し、政治的権力のあらゆる制度と活動から社会を解放し、そして共同体のための協同的労働と事物の計画的な管理とに基礎を置くような、人々の自由な集団の連合に道を開く、という課題でなければならない。都市と農村においてあくせく働いている大衆にこの大きな目標への用意をさせること、そして彼らを戦闘力として結集すること……それは現代のアナルコサンジカリズムの目的であり、このことにおいてその全目的は尽くされるのである。」

社会主義者として、ロッカーは、「労働者の、重要な、最終的な、

完全な解放は、一つの条件においてのみ可能である。その条件と

は、資本の収用、すなわち原料と土地を含めてのいつさいの労働の用具を労働者総体によって収用することである」(バクーニン)ということを当然のこととしたであらう。アナルコサンジカリストとして、彼は、さらに次のことを力説している。すなわち、労働者の諸組織は「諸理念を創造するだけでなく、革命前の時期において未来そのものの諸事実をも創造する」(バクーニン)ということであり、それらは、それ自体のなかに未来社会の構造を具現するというものである。そして彼は、収奪者を収奪するのはもちろん、国家装置を解体するであろうような社会革命を待望している。すなわち彼は、「政府の代わりにわれわれが据えるのは産業組織である」といっている。

「アナルコサンジカリストは、社会主義の経済秩序は政府の布告や法令によってつくりだすことはできない。ただ、生産の各特殊部門における手と頭脳をもった労働者の社会連帯的協同活動だけがつくりだせるものである、と信じている。すなわち、生産者各個の集団、各個の工場、産業の各個の部門が総体的な経済の有機組織の独立した構成単位であり、それらの間の自由な相互的合意に基づいて共同体のために生産と製品の流通を組織的に遂行する、こういった形で生産者自身によるいつさいの工場経営の接収によって社会主義の経済秩序はつくりだされる、とアナルコサンジカリストは信じている。」

ロッカーは、スペイン革命の最中、このような理念が劇的な仕方で行に移されたとき、こう書いていた。革命勃発の直前、アナルコサンジカリストの経済学者、ディエゴ・アバド・デ・サンティ

ヤンは、次のように書いている。

「……社会変革という問題に直面して、スペイン革命は国家をもつてそれを遂行する機関と考えることはできない。革命は生産者の組織に頼らなくてはならない。」

われわれはこの規範に従ってきた。そしてわれわれは、物事の新しい秩序をうち建てるためには組織された労働者に優越する権力が必要だ、という仮説を立てる必要を認めない。私有財産が廃止されてしまい、寄生も特権も存在しないような経済組織において、国家が何らかの機能をもちうるなら、それはどんなものか指摘してくれる人がいたら有難いものだ。国家がなす圧制はなまぬるいものではない。国家など用がなくなるようにするのが、スペイン革命の課題でなければならない。スペイン革命は、生産者に社会の富を与えるか、あるいは与えないか、のどちらかである。与える場合には、生産者は適正な集産的流通のために彼ら自身を組織し、国家は何もすることがない。また、与えない場合には、革命といってもそれは嘘であつたのであり、国家は存続するのである。

われわれの全国連合経済評議會は政治的権力ではない。それは経済的な、また管理的な規制力である。それは下から方向性を与えられ、地方的、および全国的集会の決議に従って活動する。それは連絡機関なのであつて、それ以外の何ものでもない。」

エンゲルスは、一八八三年の書翰のなかで、このような考え方に對しての不同意を表明している。

「アナキストたちは、物事を上下あべこべにしている。彼らは、プロレタリア革命は国家の政治的組織を廃除することから始まら

なくてはならないといっている……しかしそのような時機にそれを破壊することは、勝利をかちえたプロレタリアートが、それによって新たに奪取した権力を主張しうる、また資本主義側の彼らの敵を抑えつけることができる、さらにまた社会の経済的の革命を遂行しうる、唯一の有機組織体を破壊することであろう。そしてこれがなければ、勝利も全部、新たな敗北に終わるに違いない、そしてバリ・コミューンの後になされたような労働者の大量殺戮に終わるに違いない。⁽⁵⁾

これと対照をなして、アナキストたちは——なかでもバクーニンは最も雄弁に——「赤色官僚主義」の危険を警告した。赤色官僚主義こそは「この世紀がつくりだした最も悪質で恐るべき嘘」だといふことがわかるだろう、と彼らはいうのである。アナルコサンジカリストのフェルナン・ペルーティエは、次のような疑問を問いかけている。「われわれが必然的にそして宿命的に屈従しなければならぬ過渡期の間でさえ、集産主義の牢獄でなければならぬのか？ あらゆる政治上の制度が消滅してしまえば、それが、生産と消費における必要によって制限される以外には制限を受けることのない自由な組織となることはできないのか？」⁽⁶⁾

この疑問に対する解答を知っている、といえる自信はない。しかし何か、ある形で積極的な解答がないならば、左翼のヒューマニズム的理想を達成するような真に民主的な革命にとって、成功しそうな見込みは、明らかに大きなものではない。マルティン・ブーバーは、次のように書くことによって、この問題を簡潔に提示している。「人は、道理の上から、こん棒にされてしまった小さな木が葉を出そうとは思わない。」国家権力の奪取か、あるいは破壊か、と

ら、それはバクーニンがバリ・コミューンについて書いたとき彼が言い表わしたものであろう、と私は信じている。彼はそこで、自分はこのいうものだ、といっている。

「私は自由を熱狂的に愛するものである。私は、自由とはその下で知性と人間の尊厳と人間的な幸福が發展し、増進しうるような独特の条件だ、と考えている。自由といっても、国家から与えられ、計り分けられ、国家によって調節されるような純粹に形式的な自由なんかではない。そんなものはいくらも変わらぬ嘘であって、実際には他の人たちの奴隷状態に基礎を置いた一部の人間の特権以外の何ものをも表わしていない。自由といっても、個人主義的な、利己的な、ケチな、虚構の自由なんかではない。そんなものはJ・J・ルソーの徒やその他のブルジョア自由主義の諸派が賞讃しているもので、彼らは、すべての人々がもっているつもりにならされているニセの権利は、各人の権利を制限する国家によって代表される、と考えているのだ——だがこんな考えは、各人の権利を必然的にゼロにしてしまうのだ。私が意味しているのは、そんな自由ではなくて、その名に値する唯一の種類の自由である。それは各人に潜在的に備わっている物質的、知的、道德的な力を全部、十分に發展させることにある自由である。それは、われわれ自身の個人としての天性の法則によって決定される以外には、いかなる制限をも認めないような自由である。そしてこの法則は、われわれの外や上にあるいかなる外部の立法者から押しつけられたものではなく、われわれの物質的、知的、道德的な存在の基底そのものを形づくる、内在的で生得のものであるので、このような法則による制限は、当然、制限とは考えられない——

いう問題は、バクーニンが、彼をマルクスから分かつ根本的な係争問題である、とみなしたものである。⁽⁷⁾この問題は、それ以来一世紀にわたって、繰り返しの形で起こっては、「リバータリアン」社会主義を「権威主義的」社会主義から分離させてきたのであった。

赤色官僚主義に対するバクーニンの警告にもかかわらず、またその警告がスターリン独裁下で事実となったにもかかわらず、一世紀前になされたこの争論を解釈するにあたって、現代の諸社会運動の歴史の起源に関してそれらが主張するところに頼るのは、明らかに大きな間違いであろう。わけでも、ボルシェヴィズムを「実践されたマルクシズム」とみなすのは誤りである。それよりも、ロシア革命の歴史的状况を考慮に入れている左翼のボルシェヴィズム批判は、ずっと正鵠を射ている。⁽⁸⁾

「反ボルシェヴィキの左翼労働運動は、レーニン主義者に反対した。それは、レーニン主義者たちがロシアにおける革命の動乱を、完全にプロレタリア的な目的のために、十分に利用するところまでいかなかったという理由による。レーニン主義者たちは環境の囚人となった。そして国際的な急進主義を、ロシアだけに特有の必要を充たすために利用した。そのような必要はすぐにボルシェヴィキ党——国家の必要と同義となった。ロシア革命の『ブルジョア的』様相は、今やボルシェヴィズムそのもののなかに見出されるようになった。レーニン主義は、ただ戦術的な論争点において国際社会民主主義と違うだけで、国際社会民主主義の一部になっていると判断される。」⁽⁹⁾

もしもアナキズムの伝統のなかに一つだけ指導的理念を求めると

なぜならそのような法則は、われわれを制限するのではなくて、われわれの自由の現実で直接的な条件となるものだからである。⁽¹⁰⁾これらの理念は、啓蒙運動から発達してきたものである。その根は、ルソーの『人間不平等起源論』や、フンボルトの『国家行為の限界』にあり、またカントがフランス大革命を擁護した際の、自由は自由をうるのにふさわしい成熟を身につけるための必要条件であって、そのような成熟が達成されたときになって与えられる贈物ではない、という主張にあるのである。⁽¹¹⁾産業資本主義は、新しい、思いもかけなかった不正の制度であるが、その発展につれて古典的自由主義と啓蒙運動は邪道にそれ、新興の社会秩序を支持するためのイデオロギーになった。だが古典的自由主義の理想と、啓蒙運動の徹底的なヒューマニズムの教えを保存し、拡充したのは、リバータリアン社会主義であった。

事実、古典的リベリズムを社会生活に対する国家の干渉に反対させるようにしたのと同じ仮定のもとでも、資本主義の社会関係はやはりがまんできないものである。たとえばフンボルトは、ミルの先触れとなり、ミルにその著述をさせる刺激となったであろうと思われる彼の著作のなかで、国家の行為に反対している。それは、国家は「人の個人的目的を無視して、人を国家が恣意的に定めた目的に奉仕するための道具にする」傾向がある、という理由によるのである。彼は次のように主張している。「人の自由な選択から生じたのではないことは、どんなものにしても、人の存在そのもののなかに入っていない。それは人の真の性質とは相容れないものである。人は、そのようなことをするとともに、真に人間的なエネルギーをもってそれを遂行するのではなくて、単に機械が機構通りにキツチリ

動いているようにそれをしていただけのことである。」自由であるという条件の下で、「あらゆる農民も職人も、芸術家の域に高められよう。すなわち、自分自身の労働をそれ自体のために愛する人たちは、そのような労働を彼らの創造性と工夫の才によって向上させ、それによって彼らの知性を啓発し、彼らの品性を高潔なものにし、また彼らの楽しみを向上させ、洗練されたものにするのである。」人が単に外からの要求と外にある権威に依っているだけのとき、「われわれは、彼がすることを嘆賞するかもしれない、けれども人間としての彼は軽蔑する。」なおまたフンボルトは素朴な個人主義者ではなかった。彼は、彼の指導的理念を次のように要約している。

「……彼らは人類社会のあらゆる桎梏をうちくदैいていく間に、できるだけ多くの新しい社会的キズナを見出だそうと試みるであらう。孤立した人間は、桎梏を負わされた人間が発展しえないのと同様に、発展しえないのである。」

この自由思想の古典は、一七九二年に完成されたものであって、まだ十分に熟してはいないけれども、その本質においては強く反資本主義的なものである。その理念が産業資本主義のイデオロギーに変形されうるとしたら、それが認められなくなるまで希釈されなければならぬであろう。

社会的桎梏が社会的連帯のキズナと替えられ、労働が自由に営まれるような社会のヴィジョンについて、若き日のマルクスは、労働の疎外を扱った議論のなかで述べている。⁽¹³⁾「労働の疎外とは、労働が労働者にとって外的であり、労働者の本質に属していないことであり、……〔そのため〕労働者は、自分の労働のなかで肯定される

のではなくて否定され……〔そして〕その肉体を痛めつけ、精神を荒廃させる。」——疎外された労働は、「労働者の一部を野蛮な労働の中へ追い返し、その他の労働者たちを機械にしまっよう、こうして人間から「自由な意識活動」と「生産的な生活」というその「類的性格」を奪ってしまうのである。」

同様にマルクスは、「仲間を必要とする新しいタイプの人間」のことも考えている。「労働者の連合は」未来の人間関係の社会的構造をつくるための真の建設的な努力〔となる〕⁽¹⁴⁾。古典的リバータリアン思想が、自由と多様性と自由連合に対する人間的な要求についてのいっそう深みのある仮定の結果として、社会生活に対する国家の干渉に反対する、ということは真である。同じ仮定によって、資本主義的生産関係、賃労働、競争、「所有欲にかたまつた個人主義」のイデオロギー——これらはすべて根本的に反人間的と見なされなければならない。リバータリアン社会主義を、啓蒙運動の自由主義的理想の継承者とみなすのは、当をえている。

ルドルフ・ロッカーは、現代のアナキズムを「フランス大革命の間中、そして大革命以来、ヨーロッパ人の知的生活において独特の表現を見出してきた社会主義と自由主義という二つの思潮が合流したものである」と述べている。だが、古典的な自由主義の諸理想は、資本主義的経済の諸形態という現実によって破壊させられた、と彼は論じている。アナキズムは、「人が人を搾取すること」に反対するがゆえに、必然的に反資本主義的である。けれどもアナキズムは、また、「人が人を支配すること」にも反対する。アナキズムは、「社会主義は、自由であるか、さもないければ全然自由でないであらう」と主張する。「アナキズムの存在に対する真実かつ深遠な正当化は、このことの認識において見出される。」

このような観点から、アナキズムは社会主義のリバータリアン的な一派であると見られよう。ダニエル・ゲランが、最近翻訳された『アナキズム』という本や、その他の著作のなかで、アナキズムの研究にとりかかったのは、このような精神においてであった。彼は、アドルフ・フィッシャーの次の言葉を引用している。それは、「あらゆるアナキストは社会主義者である。けれども、すべての社会主義者が必ずしもアナキストだとは限らない」というものである。同様にバクーニンは、彼の「一八六五年の「アナキスト宣言」、彼が企画した革命的国際同盟団の綱領」において、その成員はみな、まず社会主義者でなければならない、という原則を立てている。

賃金入りのアナキストは、生産手段の私有と、その制度の構成要素である賃金奴隷制とに反対しなければならない。それらは、労働は生産者による管理の下で自由に営まれなければならない、という原理と相容れないからである。マルクスが言ったように、社会主義者は、労働が「単に生活手段でなく、第一の生活の必要にさえなる」⁽¹⁶⁾ような社会を待ち望んでいる。だがそのようなことは、労働者が、内的な衝動によるよりも、外的な権威や要求によって駆り立てられるときは、不可能なことである。「賃労働は、どんな形のもので、たとえそのあるものが他のものよりも不愉快さの程度が少なくないにしても、賃労働そのものの悲惨さを除去しえないのである。」⁽¹⁷⁾賃金入りのアナキストは、疎外された労働だけでなく、知覚を鈍くさせるような労働の専門化に対しても反対しなければならない。

「そのような専門化は、生産の発展のためのすべての手段が……

労働者を部分人間に不具化し、彼を機械の付属物に引下げ、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、独立の力としての科学が労働過程に合体されるにしたがって労働過程の精神的諸力を彼から疎外する……ときに起こる。」⁽¹⁸⁾

マルクスは、このことを、工業化の不可避の随伴物とは見なかった。それよりも彼は、このことを資本主義的生産関係の「一様」として見た。未来の社会は、「一つの社会的細部機能の担い手たるにすぎない部分個人を、変化する労働諸要求に応じうる全体的に発達した個人に置き換えることに努めなければならない。後者は、彼にとって種々の社会的機能が……彼自身の自然の力を自由に発揮する多くの様態のはけ口にすぎない、というような個人である。」⁽¹⁹⁾

そのための先要条件は、社会的範疇としての資本と賃労働（労働者国家）の産業軍や、いろいろな現代的な形態の全体主義や、国家資本主義はいずれもなくの廃止である。人間の機械の付属物への、生産の専門化された道具への引き下げは、原則としては、科学技術の適正な発展と使用によって、悪化されるよりは克服されたかもしれない。だがそれは、人を、彼の個人的な目的を無視して、自分たちの目標に奉仕する道具にする者どもによってなされる独裁的な生産の統制という条件のもとでは、克服されないであろう。

アナルコサンジカリストは、資本主義のもとでさえも、戦闘的な闘争に従事するとともに民主的な基礎の上に生産の組織を接収する用意をするような「自由な生産者の自由な連合体」をつくりだそうとした。このような連合体は、「アナキズムを実習する学校」⁽²⁰⁾としての役にたつだろう。よく引用されるブルードンの言葉にあるように、生産手段の私的所有が単に「盗奪」の一形式——「強者による

弱者の搾取⁽²¹⁾——であるならば、国家の官僚制による生産の管理は、その意図はいかに仁慈の情に出るものであっても、これまた、筋肉労働にしても知的労働にしても、労働が第一の生活の必要になりうるような条件をつくりだすものではないのである。そこでこれらは両方とも克服されなければならない。

アナキストは、生産手段に対する私的あるいは官僚制的管理権への攻撃において、「歴史の第三の、そして最後の解放的進化」をもたらすために闘う人たちと同じ立ち場に立つ。第一の進化は、奴隷から農奴をつくりだした。第二の進化は、農奴から賃労働者をつくりだした。そして第三の進化は、最終の解放行為で、プロレタリアートを廃絶するものであり、この解放によって経済の管理を生産者の自由で自発的な連合体の手中に置くものである（フリーエ、一八四八）⁽²²⁾。「文明」にさし迫っている危険は、同じ一八四八年に、慧眼な観察者、トクヴィルによっても注目されている。

「財産権が他の多くの権利の起源であり基礎であつた限り、それは容易に守られた——というより、それは攻撃されなかった。すなわち、それは社会の城塞であり、その他のあらゆる権利はその出城であつたのである。それは攻撃の矢面に立つことはなかった。そして、事実、それに猛攻を加えようとする真剣な企てなどなかったのである。しかし、今日では、財産権は、貴族の世界の最後まで破壊されないでいる残りだと見られており、これだけが従前通りのままにしておかれ、平等になった社会における唯一の特権となっているが、そうすると財産権は今までは違う問題としてみられる事柄となる。労働者階級は今なお静まりかえっている、ということは私も認める。けれども彼らの心のなかで何が起こる、ということは私も認める。けれども彼らの心のなかで何が起こる、ということも私も認める。けれども彼らの心のなかで何が起こる、ということも私も認める。」

むきだしの野蛮と無法な復讐としてたち現われる……兵士どもの鬼畜的行為が、彼らをそのお抱え用心棒としている、あの文明の固有の精神を反映している……、戦いのあとの大衆の虐殺を満足そうに眺める全世界のプロレタリアーは、煉瓦と漆喰との聖物冒瀆（「家屋の炎上」）をみて恐怖に戦ったのだ。」

コミュニケーションの惨烈をきわめた破壊にもかかわらず、バクーニンは次のように書いている。パリは新時代を開いた。「それは、人民大衆の決定的な、また完全な解放の時代であり、国境を越えて、また国境があるにもかかわらず彼らが固めるであろう未来の団結の時代である……国際的であり、団結した人類の次の革命は、パリの復活であろう」——それは、世界が今なお待ちうけている革命である。

そこで筋金入りのアナキストは社会主義者、それも特定の種類の社会主義者、であるべきである。彼は、疎外され専門化された労働に反対し、労働者の総体による資本の収用を待ち望むだけでなく、この収用が直接であつて、プロレタリアートの名において行動するエリート勢力によって行なわれるものではないことを、強く主張するのである。要するに彼は、

「政府による生産の組織（に反対するであろう）。それは国家社会主義を意味する。すなわち、国家の官吏が生産を指揮すること、を、そして作業場にあつては、作業場の管理職、科学者、経営者が生産を指揮することを意味する……労働者階級の目標は、搾取からの解放である。この目標は、ブルジョアジーにとつて代わつた新しい支配的、統制的階級によって到達されはしないし、また到達されるはずはない。それは生産の主人となつた労働者によつてのみ実現されるものである。」

こつているか、考えてごらんない。正確にいえば彼らは政治的熱情によって以前ほど燃え立っていない、というのはほんとうだが、彼らの熱情は、政治的などというものではなくて、社会的なものになつてしまつていて、ということがわかりませんか？単に、しかじかの法律を撤廃するとか、しかじかの内閣や政権を退陣させることを目指すのではなくて、社会そのものの根底を解体することを目指す理念や意見……そういつたものが彼らの間に徐々に広がまつているのがわかりませんか？」⁽²³⁾

パリの労働者たちは、一八七一年には沈黙を破り、全文明の基礎である所有権の廃止に乗りだした！

「然り、諸君、コミュニケーションは、多数者の労働を少数者の富とするところのあの階級的所有権を廃止しようとしたのである。それは収奪者の収奪を目指したのである。それは、いまでは主として労働を奴隷化しこれを搾取する手段となつていてところの生産手段、すなわち土地と資本とを、単なる自由でかつ協力的な労働の要具に転化することによって、個人的所有権を一個の真実とすることを欲したのである。」⁽²⁴⁾

もちろんコミュニケーションは血潮のなかで溺死した。パリの労働者たちが「社会そのものの根底」を攻撃することによって打倒しようとした「文明」は、ヴェルサイユ政府の軍隊がパリをその住民から奪回したときに、もう一度本性を現わした。マルクスがにがにがしげに、しかし的確に書いているように、

「ブルジョアの秩序の文明と正義とは、その秩序の奴隷と苦役者となが彼らの主人たちに対して叛逆する時は、いつもその凄惨な光のうちに姿を現わすものである。その時、この文明と正義とは、

てのみ実現されるものである。」

これらの言葉は、オランダの左派マルクス主義者、アントン・パンネックの書いた「階級闘争についての五つのテーゼ」からとつたものである。彼は評議会共産主義運動の傑出した理論家の一人である。そして、事実、急進的マルクス主義は、アナキズムの思潮と合流している。

なおその先の説明として、「革命的社會主義」の特性についての次のような記述を考察しよう。

「革命的社會主義者は、国有化が官僚専制以外の何かになりうる、ということ否定する。われわれは、なぜ国家には産業の民衆的管理ができないか、を理解している。産業は、自分たちの間から産業運営委員会を直接選出する労働者たちによってのみ、民衆的に所有され管理される。社会主義は根本的に産業の制度である。そしてその支持層は産業の性格をもつものである。従つて社会的諸活動と社会の諸産業を営む人たちは、社会を運営するための地方および中央の評議会に直接代表を出すのであろう。そのような派遣代表のもつ権力は、こうして、仕事を営み共同体の要求がよくわかつている人たちから上の方へと流れていく。中央の運営のため産業委員会が開かれるとき、それは社会活動のあらゆる側面を代表するのであろう。」

「こうして、資本主義の政治的、ないしは地理的、国家は、社会主義の産業運営委員会によって代わられるであろう。一つの社会体制から別の体制への移行は社会革命であろう。歴史を通じて、政治的国家というものは、支配的諸階級が人々を統治することを意味してきた。社会主義の共和国は、共同体全体のために運営さ

れるところの、産業の統治であろう。前者は、多数の人々の経済的な、また政治的な隷属状態を意味する。後者は、すべての人々の経済的自由を意味する——それゆえ、それは真の民主主義であろう。」

これらの言葉は、ウィリアム・ポールが一九一七年の始め——レーニンの最もリバータリアン的な著作であろうと思われる『国家と革命』よりも少し前に(注8を見よ)——に書いた『国家、その起源と機能』からとられたものである。ポールは、マルクス主義「デ・レオン主義」の社会主義労働党の党员であった。そして後にイギリス共産党の創立者の一人となった。国家による所有と経営は官僚専制になるであろうという理由によって、社会革命は、それを、労働者が直接管理する社会の産業組織と取り替えないならぬという原則において、ポールの国家社会主義に対する批判は、アナキストたちのリバータリアンの教義と共通している。同様な説は、このほかにも、たくさん引用することができる。

それよりもはるかに重要なのは、これらの理念は、たとえば、第一次大戦後のドイツやイタリア、また一九三六年のスペイン(特に工業地帯であるバルセロナ)において、自然発生的な革命的行動において実現された、ということである。ある形式の評議会共産主義は、工業化された社会における革命的社會主義の自然な形式である、と主張してもよいだろう。所有者であろうと、経営者であろうと、テクノクラートであろうと、「前衛」党であろうと、どんな形のものにせよ独裁的エリートによって産業が管理されるとき、民主主義はたいしてニセモノになる、ということの直観的理解をこれは反映している。このような権威主義的支配の条件下では、その後さ

らにマルクスやバクーニンやその他のあらゆる真の革命家たちによって発展させられた古典的なリバータリアンの諸理想を実現することはできない。すなわち、そのような条件下では、人間は自分の可能性を十分に発現させられるという自由をもていないだろう。そして生産者は、依然「部分人間」であり、卑しめられ、上から指図される生産過程における道具にとどまっている。

「自然発生的な革命的行動」という語は、誤解されるかもしれない。特に「自然発生」と「革命」との両方について厳密さを欠いた談話が多く語られるときは、その恐れがある。労働者の組織は「諸理念を創造するだけでなく、革命前の時期において未来そのものの諸事実をも創造する」というバクーニンの言葉を前に引いたが、アナルコサンジカリストたちは、少なくともこの言葉を、全く本気で受けとめた。特にスペインにおいて人民革命が達成されたのは、長年の間、組織化と教育という仕事を着実にしてきたということが基礎にあったからである。そしてこのような仕事こそは、運動への打ちこみと戦闘性の長い伝統を構成する要素であった。一九三一年六月のマドリッド会議の決議と、一九三六年のサラゴサ会議の決議は、いろいろな仕方でも革命の行為を指示していた。サンティリヤンが、革命によって設立されるべき社会のおよび経済的組織についてのかなり明細な説明のなかで概要を示した諸理念も(注4を見よ)、上述の決議といくらか違っているけれども、やはり革命の行為を指示するものであった。

ゲランは次のように書いている。「スペイン革命は、民衆の意識のなかでも、またそれと同様にリバータリアン思想家の心のなかでも、ある程度熟していた。」一九三六年の始め、フランコのクーデタ

ーとともに、騒乱が革命へ爆発したときには、社会再建の課題を遂行するための構造と経験と理解をもった労働者の組織が、すでにいくつも存在していた。スペインにおける集産主義化についての文献集への序のなかで、アナキスト、アグスティン・ソウチは次のように書いている。

「長年の間、スペインのアナキストとサンジカリストたちは、彼らにとっての最高の課題は社会の社会的変革であると考えていた。彼らのサンジカや諸団体の集会において、彼らの雑誌のなかで、彼らのパンフや書籍のなかで、いつも社会革命という問題が系統的に論じられていた。」

これらのことのすべてが、自発的実践、すなわち、スペイン革命の建設的事業、の背後に存在しているのである。

ここに述べられたような意味でのリバータリアン社会主義の諸理念は、最近半世紀の工業化社会においては、おちぶれさせられてしまった。それと対照的に優勢になったのは、国家社会主義や国家資本主義などのイデオロギーであった(国家資本主義は、アメリカ合衆国において、よくわかる理由によって、ほとんど軍国主義的な性格になってきている)。けれども最近数年来、リバータリアン社会主義に対する関心が再び燃え上ってきた。私が引用したアントン・パンネクックのテーゼは、フランスの急進的な労働者の団体が出した新刊のパンフ、『労働者情報通信』からとったものである。革命的社會主義についてのウィリアム・ポールからの引用は、ウォーホル・ケンドールの論文のなかにあったものである。ケンドールのこの論文は、一九六九年三月、イングランド、シェフイールドにおける労働者管理についての全国会議で発表されたもの

である。

労働者管理をめざす運動は、ここ数年来、イギリスでは重要な勢力になった。それはいくつかの会議を開催したり、また充実した内容をもつパンフ文献も刊行した。そしてその積極的な活動者のなかには、いくつかの最も重要な労働組合の代表がいる。たとえば、機械・鑄造・合同労働組合は、その公的方針として、基幹産業を「各団における労働者管理のもとに」国有化するという綱領を採択した。ヨーロッパ大陸においても、同様な進展がみられる。一九六八年の五月革命は、もちろん、フランスとドイツにおいて評議会共産主義と、それに関連のある諸理念に対する関心をどんどん深めさせた。イギリスでも事情は同じであった。

高度にイデオロギ的なわれわれの社会の全般的に保守的な特色を前提すれば、アメリカ合衆国がこうした進展によって影響されることが比較的少なかったことも、驚くにはあたらない。けれども、それさえもやはり変わるであろう。冷戦神話の腐食は、少なくとも、これらの問題を、広くいろいろなところでもちだすことができるようにした。もしも現在の圧制の波を押し返すことができるなら、もしも左翼がそのむしろ自滅的な傾向を克服し、最近十年間に達成したことへのむきことができるなら、そうすれば次の問題は、現代社会の諸問題に敏感な人たちにあって、知的に討究すべき主要な問題となるであろう。それは、どうしたら工業化した社会を、真に民主的な路線に沿って、仕事場においても、共同体においても民主的な管理がなされるように組織することができるだろうかという問題である。そして、もしもリバータリアン社会主義のための大衆運動が発展するなら、思弁はきつと行動に移るであろう。

バクーニンは、一八六五年の宣言のなかで、社会革命の一要素は「あの青年たちのなかでも知的で真に高貴な人たちであろう。それは、生まれこそ特権階級に属していても、その高潔な信念と熱烈な念願によって、民衆の主張を自分のものにしていくような青年たちなのだ」と予言している。六〇年代の学生運動の高まりのなかに、この予言が現実のものとなるキザシが見えている。

ダニエル・ゲランは、彼の『アナキズム』で、彼が他の著作のなかで「アナキズムの復権の訴訟」として述べたことを試みている。「アナキズムの建設的思想はつねに生き生きとしたものであるし、それは再検討され選別されれば、現代の社会主義思想が新しい出発をするのを助け……〔また〕マルクス主義を豊かなものとするのに貢献するであろう」と彼は論じているが、この彼の議論は説得力があると私は思う。彼は、アナキズムの「広い背後」からリバータリアン社会主義といえるあの諸理念と諸行動を選び出し、いっそう徹底的な検討を加えようとする。それは当然であり適切である。このような構成は、アナキズムの心情や理想によって奮起した大衆行動にとって都合がよいものであるばかりか、アナキズムの主要なスポークスマンたちにとっても都合のよいものである。ゲランは、アナキズムの思想だけでなく、さらに革命的闘争の過程において新しい社会の形態を実際に創造するような民衆の勢力の自然発生的な発動に対しても関心を示している。彼は、知的な創造とともに、社会的な創造にも関心を示している。そのうえ彼は、過去の建設的功業から、社会的解放の理論を豊かなものにするような教訓を引き出そうともしている。世界を理解するだけでなく、世界を変革しようと欲する人たちにとって、これはアナキズムの歴史を研究するための方法と

して適切なものである。

ゲランは、一九世紀のアナキズムを、本質的に原理的なものであり、これに対して二〇世紀は、アナキズムにとって、「革命の実践」の時であった、と述べている。彼の『アナキズム』という著書は、この判断を反映している。彼によるアナキズムの解釈は、意図的に未来に向かっていく。民衆による革命は、「力によって支配する封建的あるいは中央集権的権力」を「古い形の国家の崩壊と消滅を意味するような」ある形の共同体的システムに替えようとするものだ、ということをもアルトゥール・ローゼンベルグはかつて指摘したことがある。そのようなシステムは、社会主義的なシステムであるか、あるいは「民主主義の極度まで進んだ形態」のどちらかであろう……〔そして極度まで進んだ形の民主主義とは〕、「社会主義が個人の自由を可能な限りの最高の程度まで享受しようとする世界においてのみ実現されるものなので、それは社会主義の予備的狀態なのである。」この理想は、マルクスとアナキストに共通であった、と彼は記している。⁽³²⁾この解放のための自然な闘争は、経済的、また政治的生活における集中という今日広まりつつある傾向と反対の方向に進むものである。

一世紀前にマルクスは書いた。パリの労働者たちは「そこにはただ一つの選択しかない——すなわちコミューンか、帝政か——それがいかなる名称のもとに再現しようとも——という選択しかないということを感じたのだ。」

「帝政は、それが公共の富に与えた荒廃によって、それが育成した大規模な財政的詐欺によって、それが人為的に促進された資本集中に対して与えた支持と、それに伴う彼ら〔中産階級の大部分〕

自身の仲間の収奪とによって、経済的に彼らを破滅せしめた。それ〔帝政〕は彼らを政治的に抑圧し、その躁妄によって彼らを道徳的に奮激せしめ、彼らの子供の教育を無知な兄弟に手渡すことによって彼らのヴォルテール主義を侮辱し、それが招来した破滅に対してただ一つの対価——すなわち帝政の消滅——しかあとに残さなかったところの戦争に彼らをまっ逆様につき落とすことによってフランス人としての彼らの国民的感情を憤激せしめた。」⁽³³⁾

みじめな第二帝政は、「ブルジョアジーがすでに国民を支配する能力を失いはしたが労働者階級が未だこの能力を獲得していなかったある時に可能な唯一の政府〔政体〕形態であったのだ。」これらの言葉を一九七〇年の帝政的諸制度に妥当するように言い換えるのは、特にむずかしいことではない。「人類を、経済的搾取と政治的、社会的奴隷状態という災いから解放する」という問題は、現代においても依然われわれにとっての問題である。このことがそうである限り、リバータリアン社会主義の教義と革命の実践とは、インスピレーションとしての、また指標としての役に立つであろう。

原註

- (一) Octave Mirbeau, James Joll, *The Anarchists*, Little Brown, 1964 に引用されている。
- (二) Monthly Review Press から英訳が発行されている。それにこの論文の一部が序文として載っている。
- (三) Secker and Warburg, 1938.
- (四) *After the Revolution*, New York, Greenberg, 1937. 最後の章はスペイン革命が勃発してから数カ月後に書かれたが、そこで彼

は、これらの路線に沿ってそれまでに達成されたことに対して不満を表明している。この問題は、なお注意深く研究されなければならないけれども、その成果は印象的なものであったと私は思っている。

- (五) Robert Tucker, *The Marxian Revolutionary Idea*, Norton, 1969 のなかのマルクス主義とアナキズムについての議論に引用されている。

- (六) Joll の前掲書中に引用されている。出典は「*L'Anarchisme et les syndicats ouvriers*», *Les temps nouveaux*, 1895 による。D. Guérin 編 *Ni Dieu, ni Maître*, Lausanne, Le Cité Éditeur, 発行年月の記載なし。に全文が収められている。Ni Dieu, ni Maître は、優れたアナキズムの歴史的アンソロジーである。

- (七) マルクスは「もちろんこの問題を全く違った見方で見ている。この問題に対するパリ・コミューンの影響についての議論のためには」Ni Dieu, ni Maître のなかの Daniel Guérin のいくつかの論評を見よ。それらの論評は「ちょっと拡充あれど」彼の *Pour un Marxisme libertaire*, Robert Lafont, Paris, 1969 に収められている。注24を見よ。

- (八) 一九一七年中のレーニンの左翼への「知的偏向」については Robert Daniels, "The State and the Revolution: a Case Study in the Genesis and Transformation of Communist Ideology", *American Slavic and East European Review*, Feb., 1953 を見よ。

- (九) Paul Mattick, *Marx and Keynes*, Porter-Sargent, 1969.
- (一〇) *La Commune de Paris et la notion de l'Etat*. Ni Dieu, ni Maître に転載されている。
- (一一) 自由の条件としての個人の天性についてのバクーニンの終結的評言は「合理主義とロマン主義の伝統のなかで発展した創造的思想へ

のアプローチとも類似しているものである。私の *Cartesian Linguistics*, Harper & Row, 1966 年 4 月 *Language and Mind*, Harcourt, Brace, 1968 を見よ。

- (2) Cambridge University Press によって、一九六九年に英訳され、翻刻されている。それは J. W. Burrow により編集されたもので、彼による序文が付いている。

- (3) 類似性は Burrow に 47 ページ注目されている。Cartesian Linguistics, 特に注 51 を見よ。

△このパラグラフの引用文は、フロム『マルクスの人間観』（合同出版、昭和四五年所収、石川康子訳「経済学哲学草稿」より）

- (14) Shlomo Avineri, *The Social and Political Thought of Karl Marx*, Cambridge, 1968. *The Holy Family*, 1845 のなかの論評に言及している。

Avineri は「社会主義運動のなかで、イスラエルのキブツ主義だけが『現在の社会組織の諸様態と諸形式が未来社会の構造を決定するであろう』ということを理解していた」といつている。しかしながら、このことは、前に記したように「アナルコサンジカリズムに特徴的な立場である」。

- (15) すでに引用された文に加えて、彼の *Jeunesse du socialisme libertaire*, Paris, Librairie Marcel Rivière, 1959 を見よ。

- (16) *Critique of Gotha Program*. △引用文は、西雅雄訳「ロータ綱領批判」(岩波文庫) 昭和四五年より。

- (17) *Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie*, Mattick の前掲書に引用されている。これと関連して、Mattick の最近の試論「Workers' Control」及び Avineri の前掲書を見よ。

Mattick の試論は P. Long 編 *The New Left*, Porter-Sargent, 1969 に収められている。

- (18) Marx, *Capital*. Robert Tucker に よって *The Marxian*

Revolutionary Idea に引用されており、彼が「マルクスが革命家を『不満な消費者』としてよりも『挫折した生産者』としてみていることを強調しているのは、当をえている。資本主義の生産関係に対するさらに急進的な批判は、啓蒙運動のリバタリアン思想の直接の発展である」。

△引用文は、向坂逸郎訳「資本論」(岩波文庫) 昭和四十五年、より。

- (19) *Capital*. Avineri に引用されている。

△引用文については注 18 と同じ、ただしこの部分の英訳は意識されているので、それに従って訳文を改めたところがある。

- (20) Pelloutier 前掲書。

- (21) "Qu'est-ce que la propriété?" 「財産とは盗奪なり」という句は、マルクスの気に入らなかった。彼は、盗奪とは財産の合法的な存在を前提するので、この句が使われるのは論理的に問題があると考えた。Avineri の前掲書を見よ。

- (22) Buber, *Paths in Utopia*, 1945, Beacon, 1958 に引用されている。

△長谷川進訳『ユートピアの社会主義』(理想社) 昭和三十四年。

- (23) J. Hampden Jackson, *Marx, Proudhon and European Socialism*, Collier, 1962 に引用されている。

- (24) Marx, *The Civil War in France*, 1871, International Publishers, 1941. Avineri は「フーニエに引いてマルクスに 46」このまたは他の評言は「意図と計画をはっきりと語っている」と述べている。マルクスが他のところで明らかにしたように、彼の十分考究された評価は、この「宣言」におけるよりも、もっと批判的なものであった。

△引用文は、次のものとともに、木下平治訳「フランスの内乱」(岩波文庫) 昭和四十四年、より。

- (25) Glasgow, Socialist Labour Press, 発行年月の記載なし。
(26) 若十の経歴については Walter Kendall, *The Revolutionary Movement in Britain*, Weidenfeld and Nicolson, 1969 を見よ。

- (27) *Collectivisation, L'Oeuvre constructive de la Revolution Espagnole*, Edition, C. N. T., Toulouse, 1965, 初版 Barcelona, 1937.

- (28) 十分な議論のためには、Michael Kidron, *Western Capitalism Since the War*, Weidenfeld and Nicolson, 1968 を見よ。

- (29) Hugh Scanlon, "The way forward for Workers' Control", Institute for Workers' Control, 91 Goldsmith Street, Nottingham, Pamphlet Series No. 1, 1968 を見よ。Scanlon は AEF の組合長である。この労働者管理協会は、一九六八年三月の「労働者管理についての第六回大会」の決定によって設立されたもので、知識の普及と研究のための本部の役をするものである。

- △AEF は Amalgamated Engineering and Foundryworkers' Union の略称。訳語は労働省で用いているものを用いる。

- (30) *Ni Dieu ni Maître* の序文。

- △江口幹訳「現代アナキズムの論理」(三一新書) 昭和四十四年。

- (31) 右に同じ。

- (32) *A History of Bolshevism*, 1932 英訳 Russell & Russell, 1965.

- (33) *The Civil War in France*.

△引用文については、注 24 と同じ。

編集者のコメント

この論文は「アナキー」一一六号(一九七〇年十月)に掲載され

た Noam Chomsky の Notes on Anarchism の全訳である。『アナキー』の脚注によると、最初 New York Review of Books に発表された、とある。原注にもあるとおり、その一部はマンズリー・レヴェー社から刊行されたダニエル・ゲラン『アナキズム』(邦訳名は『現代のアナキズム』の英訳の序文になっている。

チョムスキー(一九二八年)はアメリカ有数の言語学者で、マサチューセッツ工科大学教授だが、同時にベトナム反戦の運動家でもある。彼がこの論文にみられるような見解をもつにいたったのは、おそらくベトナム反戦運動をめぐってであろう。チョムスキーの政治論文集 *American Power and the New Mandarins*, Penguin Books, 1969. (邦訳もでているが、大変ひどい訳書なのでおすすめされない)に収められている主論文 Objectivity and Liberal Scholarship でも、彼はリベラルな歴史家たちのスペイン内戦の研究が、アナキズム革命の事実をほとんど黙殺している実情を指摘し、その「反革命への追従」を糾弾している。

この論文を通読すれば分かるようにチョムスキーのアナキズムの造詣は必ずしも深くないし、彼がよりどころとしている資料も一級のものばかりとはいえない。たとえばロッカの『アナルコサンジカリズム』は、彼のライフワーク『ナショナルリズムと文化』に比べれば、見劣りするパンフレットである。この論文にある一種の生硬さは、おそらくチョムスキー自身のなかでアナキズムが十分に消化されていないためであろう。けれども、この欠点を補ってあまりあるのはあれこれのイデオロギーではなく、人間解放を考察の中軸にすえ、そこを基点としてアナキズムやマルクス主義をとらえかえている一貫した態度である。